VI. IRPA-10 プログラム委員会の活動について

石田 順一郎^{*1}

VI. Activities of the Programme Committee

Jun-ichiro ISHIDA^{*1}

1. はじめに

1996年4月17日、ウィーンで開催されたIRPA-9の総会において、ノルデック、日本、スペインの中から投票によりIRPA-10の開催地として日本が選出されてからの4年間、プログラムの構築、大会の円滑な運営に向け、草間朋子大会長（大分県立看護科学大学長）を中心に多くの関係者の努力、協力により、数々の活動を展開してきた。ここでは、国際及び国内プログラム委員会の活動概要を中心に、プログラム作成の経緯を紹介する。

2. 経緯

2.1 組織・体制

1996年4月17日のIRPA総会におけるIRPA-10日本開催の決定を受けて、4月19日の第40回IRPA Executive Councilにおいて、国際プログラム委員会 (International Congress Programme Committee, ICPC) のChairpersonとしてK. KASE, Scientific Secretaryとして石田が選ばれた。通常、国際会議の開催に当たっては、プログラム委員会の主要ポストがホスト国の関係者で占められ、プログラムの内容、座長、発表者等、ホスト国の思惑で決定されがちになるが、IRPAの規定では、「Chairpersonはホスト国のメンバーであってはならない。Scientific Secretaryはホスト国から推薦される。」と出身母体についても明確に記されており、IRPAとしてのバランス感覚が示されており興味深い。

また、ICPC委員については草間大会長が提示した案であらかたの合意が得られた。その際、メンバー構成を

決定する上で、小さな学会及び地理的分布 (the geographical distribution of membership) を配慮することが特記された。特に、後者の『地理的分布』という言葉は、その後、IRPA-10プログラムを具体化していく上での一つのキーワードとなった。最終的には、会長・副会長・プログラム委員長三者の合意の下、以下のメンバーがプログラム委員に決定された。この内、スペインのE. GALLEGOはIRPA-11をマドリッドで開催する場合に備えて、また、フランスのJ. LOMBARDは旅費は自分で出すので委員に加えて欲しいということで、後から委員として加わり、最終的には海外委員13人、日本側委員7人の計20人となった。

Kenneth KASE (Chairperson, USA)

Jun-ichiro ISHIDA (Scientific Secretary, JAPAN)

Klaus E. DUFTSCHMID (IRPA President, AUSTRIA)

Tomoko KUSAMA (IRPA Vice President of Congress Affairs, JAPAN)

Phil METCALF (IRPA Publications Director, SOUTH AFRICA)

Michael I. BALONOV (RUSSIAN FEDERATION)

Roger COATES (UK)

Eduardo GALLEGO (SPAIN)

Jiro INABA (JAPAN)

Masahito KANEKO (JAPAN)

Dewhey LEE (KOREA)

Jacques LOMBARD (FRANCE)

Kiyohiko MABUCHI (JAPAN)

Takashi NAKAMURA (JAPAN)

Richard V. OSBORNE (CANADA)

Elias PALACIOS (BRAZIL)

Herwig G. PARETZKE (GERMANY)

^{*1} Scientific Secretary of the International Congress Programme Committee, IRPA-10 核燃料サイクル開発機構 安全推進本部; 茨城県那珂郡東海村 (〒319-1184) Safety Promotion Project, Japan Nuclear Cycle Development Institute; Tokai-mura, Naka-gun, Ibaraki-ken E-mail: jishida@hq.jnc.go.jp

Masao TAKI (JAPAN)

Jack VALENTIN (SWEDEN)

Kedao WEI (CHINA)

また、上記国際プログラム委員会をサポートする組織として、稲葉次郎氏（環境科学技術研究所）を委員長とし、飯田孝夫（名古屋大学）、伊藤勝陽（広島大学）、金子正人（東京電力）、草間朋子（大分県立看護科学大学）、多氣昌生（東京都立大学）、中村尚司（東北大学）、馬淵清彦（放射線影響研究所）、石田順一郎（核燃料サイクル開発機構）の各委員からなる国内プログラム委員会を組織し、上記 ICPC の前後に会合を持ち、ICPC で発言すべき日本側意見の取りまとめ及び ICPC での決定事項の具体化のための活動を行った。

2.2 プログラムの立案

(1) 第1回国際プログラム委員会（1996年10月19日（土）at 東京）

IRPA の規定上では、ICPC は大会前に2回開催すればよいことになっているが、Chairperson の K. KASE の強い要望により、旅費は参加者各自負担との了解のもと、急遽、第1回委員会を開催することとなった。旅費を参加者自己負担としたため、第1回委員会は、K. KASE と国内委員だけの会合になるかと思われたが、R. COATES (UK), J. LOMBARD (FRANCE), H.G. PARETZKE (GERMANY) 及び J. VALENTIN (SWEDEN) も加わり、活発な議論がなされた。この第1回委員会では、第2・3回委員会の会合予定、IRPA-10 開催案内書の送付時期（計2回）、アブストラクト・フルペーパーの締め切り日等の、IRPA-10 開催までのスケジュールを先ず決定した（その後の4年間の活動が、このとき決定したスケジュール通りに進行したことは IRPA-10 成功の一因と言える）。

次いで、IRPA-10 の大会テーマを「Harmonization of Radiation, Human Life and the Ecosystem」と決定し、プログラムの全体構成の検討、IRPA-10 の PR 活動等に用いることとした。

第1回国際プログラム委員会出席者

プログラムの構成については、事前に ICPC 委員全員に、IRPA-9 の感想・反省を踏まえ IRPA-10 としてどうあるべきかを文書で提出するように求めていたため、欠席委員の意見も含めて検討することができた。この際、IRPA-9 の反省事項の一つである「一般参加者のポスター発表及び口頭発表」について最終的にどうするか結論はでなかったものの、招待講演、シンポジウム、全体シンポジウム、ハイライト等の IRPA-10 の基本骨格とともに、従来の Refresher Courses を拡張した Eye-Openers や関連学会のセッションの設置が決定された。また、主要な Scientific Topics についても日本及びスペイン提案を基に検討の結果、従来のカテゴリーを分割あるいは新設し、以下の11項目を決定した。

- ① Natural Radiation Exposure
- ② Health Effects of Ionizing Radiation
- ③ Dosimetry and Instrumentation
- ④ Radiation Protection in the Environment
- ⑤ Waste Management and Decommissioning (④からの分割・新設)
- ⑥ Radiation Protection at Workplaces
- ⑦ Radiation Protection for Medical Exposure
- ⑧ Protection against Non-ionizing Radiation
- ⑨ Standards and Interpretation
- ⑩ Training, Education and Communication (⑨からの分割・新設)
- ⑪ News from National Radiological Protection Societies (新設)

以上の項目を取りまとめた第1回アナウンスメントを30,000部作成し、IRPA加盟各国に1997年7月送付したほか、各所で開催されている国際会議の出張者に託送して、IRPA-10 日本開催の案内に努めた。

その他特記事項として、丁度、インターネットが出回り始めた時期でもあり、会議案内のために IRPA-10 ホームページを構築することや、委員間の議論を深めるために ICPC 委員限定の On-line Forum を設置することとした。前者は日本コンベンションサービス(株)に、後者は Stanford Linear Accelerator Center に設置した。

(2) On-line Forum での意見交換

第2回委員会を開催するまでの2年間、委員間の意見交換は、上記 On-line Forum や急速に普及した E-mail が有効に活用された。

先ず一つの大きな動きは、上記第1回 ICPC での検討事項を1997年4月に開催された IRPA 理事会に報告したことで、①招待講演を RERF, ICRP & ICNIRP, ICRU & UNSCEAR の3セッション設ける、②プログ

ラムは「人と環境との調和」にもっと焦点をあてる、③ Associate Societies Forum を IRPA 総会と独立して行い、J. LOCHARD 及び G. WEBB が実施方法について検討する等の意見が出された。これら内容は早速 On-line Forum に掲載し、各委員間での情報共有化を図るとともに、意見交換を行った。今でこそ当たり前になっているが、インターネットで意見のやり取りができることに新鮮な印象をもった記憶がある。

そこで国内プログラム委員会としても On-line Forum を活用すべく、日本で開催される初めての IRPA 国際会議に対し、Eye-Openers, 招待講演, シンポジウム, 全体シンポジウム, ポスター発表, その他について、どのように実施すべきか意見を取りまとめ提言した。特に、IRPA-9 のポスター発表と3分間のミニ口頭発表は、IRPA-8 以前の大会と異なった新方式であり、結果的に一般参加者から余り歓迎されなかったとの判断から、ICPC が16件のシンポジウム（ワークショップ又はプラットフォームと呼ぶかなど、呼称をどうするかは中々決着がつかなかった）の座長を選び、口頭発表者は投稿されたアブストラクトの中からシンポジウムのテーマにふさわしいものを選定してはどうか、また、ポスター発表をラポーターが行うことにしてはどうかなど提案した。前者については、海外の委員は ICPC が座長を選び、その座長に口頭発表者を選定させるとの意見が大勢を占める感があったが、一般参加者の参加意欲を促進させる観点から、最終的には日本側提案通り、投稿されたアブストラクトの中から口頭発表者を選定することでほぼ合意が得られた。後者については賛成の方もあったが、発表件数が多すぎ一人のラポーターがカバーできる範囲が限定されること、担当セッションを適切に総括できるラポーターを見いだすことなどから、今回の大会では見送ることとした。

上記ポスター発表の検討と並行して議論の多かった点は、シンポジウム及び Eye-Openers の演題についてであった。それぞれに相応しいテーマを、各委員から提示してもらい、最終的には、前者については42件、後者については31件のテーマについて提案があり、意見交換を行った。

これら On-line Forum での意見については K. KASE が取りまとめ、翌1998年5月にパルセロナで開催された IRPA 理事会に報告し意見を求めた。投稿されたアブストラクトの中から口頭発表者を選定することは、必ずしも英語が達者でない人も対象になるため a significant challenge だとのコメントも出たようだが、一般投稿者に口頭発表の機会を与えることは意義が

大きいとして、日本側意見をベースにした提案が了承されたほか、口頭発表も含め全ての発表はポスターとして掲示すること、プロシーディングスは CD-ROM とすること等の意見が出された。また、Associate Societies Forum の運営方法、座長や発表者に対する財政支援等について検討された。

(3) 第2回国際プログラム委員会（1998年10月16日（金）～17日（土）at 大分）

On-line Forum での意見交換及び IRPA 理事会での確認を踏まえ、第2回委員会開催の運びとなった。この第2回 ICPC での主な議題は以下の通りである。

- ① IRPA-10 プログラム構成の決定
- ② Topical Sessions, Eye-Openers 及び Plenary Symposia の演題の決定
- ③ Topical Sessions の招待講演者の推薦
- ④ ポスター発表の運営方法について
- ⑤ アブストラクト受取の諾否判定の方法について
- ⑥ 第2回アナウンスメントの内容について、等

今回のプログラムの骨格は、上記議題に見る通り、この第2回 ICPC で決定された。わずか2日間の会合の間にこれだけの内容について効率的に議論できた背景には、上述の On-line Forum での議論が大きな役割を果たしたことは言うまでもない。懸案だったポスター発表及びシンポジウムのあり方については、これまでの議論を踏まえ、K. KASE が、日本側提案内容も取り込む形で取りまとめ、会議に諮った。すなわち、(i) 口頭発表セッションを On-line Forum で提案された42件の演題から26演題に絞込み（従来のシンポジウム16件の観点からは拡充し）ICPC が選定した Keynoter を核に、投稿されたアブストラクトの中から口頭発表者を選択する、また、(ii) この口頭発表セッションをシンポジウムという呼称から Topical Sessions に変更する、(iii) 口頭発表も含め全ての発表はポスター掲示する等の提案がなされた。Topical Sessions の演題については、Eye-Openers 及び Plenary Symposia の演題と合わせ、IRPA-10 大会テーマ「Harmonization of Radiation, Human Life and the Ecosystem」及び11項目の Scientific Topics を横におきながら、全体の整合性を見での議論の結果、26件の Topical Sessions, 16件の Eye-Openers 及び3件の Plenary Symposia の演題が決定された。この時、各演題の取りまとめ責任者（Chair & Keynoter 又は Organizer）を各委員から推薦してもらい、例の『地理的分布』を勘案して決定した。また、Scientific Topics として Radiation and Nuclear Accidents を追加し、計12項目とした。ポスター発表につ

いては、IRPA-9の際はわずか1時間だったものを発表者及び参加者が十分な議論ができるよう約2倍の1時間45分とした。

以上の内容を受け、アブストラクトのフォーマット、受付方法、締め切り等の検討を加え、関係者への周知を図る第2回アナウンスメント（案）を検討した。

(4) アブストラクトの募集に向けて

第2回ICPC及び1998年12月の国際組織委員会(International Congress Organizing Committee, ICOC)での議論を踏まえ、第2回アナウンスメントの内容を詰めるとともに、インターネットを介してのアブストラクト受信試験を進めた。第2回アナウンスメントのIRPA会員への配布(8,000部)は1999年2月下旬に行ったものの、IRPA-10ホームページへの接続についてはブラウザの問題だけではなく、このようなシステムに不慣れな利用者側の問題とも絡み、甲斐倫明氏の手を大いに煩わした。アブストラクト受付処理ソフトとして、投稿者の便宜を考慮しアブストラクトの修正・追加・取り消し等の機能まで追加したことが煩雑化の原因だったかも知れぬ。日本国内の人を対象にしている場合は余り問題にならないような事柄についても、諸外国からの文書を一手に扱う際にはあらためて解決しなければならぬ問題がいくつも顕在化した。また、甲斐氏には、受け付けたアブストラクトをテーマ毎に分類し、ICPC委員だけが諾否決定のためにアブストラクトを閲覧できるような限定ホームページの作成もお願いした。

以上の準備が整い、いよいよアブストラクトの到着を待つだけになったが、アブストラクトの投稿は期待するほど進まなかった。締め切りまで2週間となった1999年8月16日現在で集まったアブストラクトが僅かに89件。保物や原子力学会のメーリングリストを使い参加を促したほか、海外の友人・知人にもメールを流した。「本当にIRPA-10国際会議を開催できるのか?」との危惧の声があちこちから聞こえ、4年間の準備期間の中で最もつらい時期であった。それに対し、催促のメールを各所に流した翌日すぐにIRPA会長のK. DUFTSCHMIDから、

“Jun, don't worry! They will all come in just before or after the deadline. /Klaus”

とのメールが届いた。この時期にこれほど有難い言葉はなかった。そして、その言葉通り、9月1日の締切当日の一日だけで200件もの登録があり、合計で千数百件の登録件数となった。まさにインターネット登録である。しかし、個々のものを詳細に調べた結果、同一アブストラクトあるいは若干の修正を施したものが多数散見さ

れ、最終的には約1,000件の登録であることが確認された。この確認作業は思った以上に困難であった。全く同一の文書であれば機械的な検索で同一のものと簡単に判断できるが、タイトル、著者名、本文の一部手直し、フォントの変更など、若干の変更の都度、新規登録として申し込んで来たものも多く、一件一件原文を確認して最終申し込みのアブストラクトを同定する必要があった。アブストラクト受付のホームページには、“Modification or Cancellation”のモードを設けておいたが、「登録番号を失念した」、あるいは「面倒である」、「心配である」等の理由でこのモードはほとんど使われることはなかった。従来の郵便による投稿の場合、事務局に届くまでの必要な日数を見込み、また、一旦投稿したものを修正するという行為がほとんどなかったことから、受付そのものは割合単純な作業であったものの、インターネットの普及は投稿者に利便性を提供した反面、事務局にとっては過大な負担を強いることとなった。いずれにせよ、第一ゲートはクリアということで、9月中旬には集まったアブストラクトをICPC委員に配布し、採用の諾否判定をお願いした。

(5) 第3回国際プログラム委員会(1999年10月21日(木)~23日(土) at 広島)

第3回ICPCでの主な議題は以下の通りである。

- ① アブストラクトの諾否判定
- ② プログラム構成の変更・組替え
- ③ Chair及びCo-Chairの決定
- ④ 口頭発表者の決定
- ⑤ 広島国際会議場のフロアプランの検討
- ⑥ アブストラクト集及びプロシーディングスの内容検討、等

アブストラクトの諾否判定に当たっては、担当するICPC委員によってばらつきが生じないように、発表内容が明確か、IRPA-10での発表として適切か、オリジナルなものか、今後の放射線防護に重要な情報を含むか、Topical Sessionsの口頭発表にふさわしい内容か等の確認ポイントを明確にした「判断基準」を作成し、カテゴリー毎に数人の委員で一次判定し、最終的には、全体会合の場で諾否を決定した。結果的には、放射線防護との関連がないもの、内容に新規性が乏しいもの等を不採用にしたが、大方のものは採用することとした。結局、事前に各委員に配布はしておいたものの、1,000件ものアブストラクトについて一件一件読んで内容を確認する本作業は相当のハードワークで、全員作業で丸一日を費やした。

Topical Sessionsについては、演題により発表者が殺

到するセッションからほとんど応募のないセッションまでかなりの偏りが生じたため、演題の分割・統廃合を行い、最終的に24の演題を選定した。次いで、それぞれのセッションのCo-Chair及び口頭発表者を選定することになったが、多分に恣意的な面があり各ICPC委員とも自国の関係者を推薦する傾向がまま見られた。以前、某大使館へ出かけIRPA-10について説明した際も、「我が国から座長をよろしく」と言われたことがあり、国際学会において座長の数をいくつ取るかが重要視されているようだ。従って、冒頭に述べた『地理的分布』を考慮してということが必要になるわけで、最後は地域バランスを見てうまく収まった感じがする。実際に国別人数をカウントしバランスを確認した。日本からの口頭発表者については、全発表者の約10%の13人が選ばれた。続いて、24のテーマを月曜から木曜にかけてどのように配列するかを検討を行ったが、4テーマが4会場で同時進行されることから、①類似テーマの重なりをなくすこと、②招待講演、Plenary Symposia, Eye-Openers, ポスター発表内容と開催日の整合性を配慮すること、③それぞれのトピックス毎の聴衆数を予測することなどを考慮した中々難しい作業であった。特に、③は予定している4会場の収容人数が異なる（A会場：1,396人、B会場：420人、C会場：150人、D会場：150人）ことから、どのように決めるかが議論され、各トピックスへの口頭発表申し込み数が聴衆の数に比例するとの仮定のもと、部屋割りを決定した。

会議場の使用計画については実際に広島国際会議場を訪れ、日本側の利用計画案を説明した所、ICPC委員全員が概して満足の意を表した。しかし、道路一つ隔てた所に用意していた会議場については「遠い、無駄なお金を使うことはない」ということで、今回のIRPA-10は全て広島国際会議場内で行うこととなった。多少窮屈になったが結果的には正しい判断だったものと思われる。

ICPC会議は3日間で終了したが、10月25日（月）から27日（水）にかけて、K. KASEと最終受諾アブストラクトの確認、ポスター掲示順の決定、ポスター発表受諾文書の確認等、実務的な最終調整を行った。

(6) アブストラクト集の編集及びプロシーディングス（CD-ROM）の作成

第3回ICPCの決定を受けて11月中旬に事務局から受諾文書とともに発表方法等を記載した文書を発表者全員に送付した。しかし、アブストラクトの締め切り（9月1日）が過ぎ、ICPC会議が終了した後も、毎日のようにアブストラクトの申し込みが続いた。当初、これらのアブストラクトに対しては、引き続きアブストラクト

集の編集作業があることから全て断っていたが、会長のK. DUFTSCHMIDから「IRPA-9では遅れた申し込みに対しても配慮してあげた」との口添えがあり、フルペーパーが期限内に準備できること及び編集作業に支障の出ないことを条件に受け付けることとした。既にICPCが終了していることもあり、受諾の可否についてはK. KASEに判断を仰いだ。キャンセルの連絡と新たに受け付けたものとがほぼ同数程度あり、最終的にアブストラクト集に掲載した件数は1,005件となった。このアブストラクト編集作業は、文字化けの対処、招待講演者のアブストラクト遅延、発表者インデックスの確認等のため5月初旬まで続いた。また、アブストラクト集が大部になるため、IRPA-9に倣って、携帯を考慮しIRPA-10プログラムの全体が概括できるよう1枚紙のCongress Plannerの作成作業も、同時進行で行った。間際になっての座長・発表者の変更が相次ぎ、アブストラクト集との整合も図りながら最新情報を提供しようとの意図から、印刷はやはり5月になってからとなった。

フルペーパーについては2月1日が締め切りであったが集まりが悪く、遅延を認めてほしいとの依頼状が沢山舞い込んだ。言い訳も多様で、日本人は概して平身低頭のお願ひパターンが主だが、海外からは自己主張的なものが多く、散々理屈を並べた後、“However, I think it would be good for our health and family life if we were granted an exemption from the time limit 1 February to be postponed to 15 February.”などと書いたものがあり、これに対しては事務局の健康と家庭生活にも配慮して欲しいと切り替えておいたが、この様に傑作なものが色々あった。こういったものへの対応やら、また、文字化けの修正等で時間を要し、CD-ROM全体構成を確認出来たのが5月7日（日）であり、その時点でコメントを入れ修正を行ったので、5月14日からのIRPA-10資料配付を考えると、まさに綱渡りの準備であった。最終的に779件のフルペーパーをCD-ROMに載せることができた。ゴールデンウィークがあったために、連絡がうまく取り合えないもどかしい面もあったが、国連科学委員会の元秘書のW. HOLZERから、“I hope you spent it in at least a somewhat “golden” way!”などと言うメールをもらいながら、集中して確認作業ができたことは有難かった。「ゴールデンウィーク様様」である。最後の追込みでの日本コンベンションサービス(株)の桜井義明氏ほかのスタッフ、特に、プログラム関連の諸対応については渡辺あすかさんの働きによるところが大きい。改めて感謝申し上げたい。

3. 最 後 に

IRPA-10の広島開催が決まってからの4年間、Scientific Secretaryとして右も左も分からない状態から、体制を整備し、計画立案、各種連絡調整等を経て、IRPA-10が漸く終了した。当初、Scientific Secretaryについては、K. KASEから「英語が堪能な者を出して欲しい」との要請があり、私の任ではないと考えていたが、元学会長の沼宮内弼雄氏の「日本には日本の考えがあるから、あんたでいいんだ」との妙に説得性のある言葉に後押しされて、特に、英語力が期待されていないのならと引き受けてしまったが、結果的に、ChairpersonのK. KASEが非常にバイタリティあり、リーダーシップあり、バランス感覚ありで、なおかつ、人間的にも魅力ある方であったことが、私にとって幸いであったような気がする。また、IRPA-10ホスト国の日本にとっても、ICPCのChairpersonがK. KASEであった意味は大きい。IRPA-10成功の要因の一つであることには間違いない。

従来、プログラム委員会委員間の意思疎通・意見交換をどのようにしていたのか良く分からないが、この数年の間に急速に普及したインターネット及びE-mailの存在なくして今回のプログラム編成作業は成り立たない。ちなみに、2000年1月から4月の4カ月間だけを見ても、K. KASEと私との間で交わしたE-mailの数は両者合計で178件にも及ぶ。平均して1日1.5件のメールが行き交ったことになる。他の方々とのやり取りも含めると更に膨大なものとなる。夕方、当方からメールを出しておく翌朝には回答が来ている、また逆もあり、という風に、このE-mailの存在は、地球が丸いおかげもあり、1日24時間を効率的に使え、プログラム編成を進める上で欠くことの出来ないものであった。

とにかく、IRPA-10は大きなトラブルもなく、最終的に同伴者を含め1,179人（海外：734人、国内：445人）もの参加者を得て無事終了した。IRPA-10終了後も下記のホームページで各種情報を提供しているのでは是非ご覧頂きたい。

当面：<http://www.oita-nhs.ac.jp/~irpa10/>

将来：<http://irpa.sfrp.asso.fr/>

最後に、IRPA会長のK. DUFTSCHMIDから会議終了後に頂いたE-mail（一部省略）を引用し、計画段階から支援・協力していただいた多くの方々と、IRPA-10に参加された皆様に感謝申し上げたい。

Wed, 24 May 2000

Dear Jun-ichiro,

Thank you for your Email and the nice words on our most pleasant and efficient cooperation. I would like to congratulate you and your colleagues for the marvelous work you did in arranging IRPA-10. It was a full success story. We enjoyed our stay in Japan very much, for my wife Lisa it was the first time. Hiroshima left great impressions on us, I never felt such a deep connection to the roots of our profession. After we left Friday we stayed four more days at beautiful Kyoto and visited many beautiful and splendid places such as the old Imperial Palace and several fantastic shrines. The Congress was extremely well organized (as I always anticipated for Japan) and the social program excellent and impressive.

Please give my best regards to all our friends, in particular Tomoko Kusama and Shohei Kato, our new colleague in the IRPA Executive council. On behalf of IRPA and very personally of myself, let me thank you and your colleagues again for all the good work you did for IRPA. Now you can relax and be proud of your success.

With best personal regards,

Klaus

Prof. Klaus E. Duftschmid
International Atomic Energy Agency